

子どもの本だな 24

このページは子どもたちにすすめたい本をとりあげています。本を選ぶときの参考にしてください。

くまのコールテンくん

ドン・フリーマン さく まつおか きょうこ やく

(偕成社)

緑のズボンをはいたくまのぬいぐるみ、コールテンくんは、デパートのおもちゃ売り場で、誰かに買ってもらえるのを待っていました。

ある朝、「ずっとまえからこんなくまがほしかったの！」と女の子がコールテンくんの前で立ち止まりました。けれども、コールテンくんのズボンのボタンが一つとれていたの、買ってもらえませんでした。お店が閉まると、コールテンくんはボタンを探し始めました。エスカレーターで家具売り場に行き、大きなベッドによじ登るとボタンがありました。マットレスのボタンを両手で力いっぱい引っ張ると、ボタンは飛び、コールテンくんはひっくり返った拍子に電気スタンドを倒しました。コールテンくんは駆けつけた警備員におもちゃ売り場の棚に戻されました。

黒の輪郭に明るい色の絵は、コールテンくんの表情や動きをいきいきと描き、次の日、再びやってきた女の子に家につれて帰ってもらったコールテンくんの喜びをあたたかく伝えます。読んでもらえば四歳から楽しめます。

(竹内)

大きなたまご

オリバー・バターワース 作 松岡 享子 訳

(岩波少年文庫 226)

ネイト君の家のめんどりが、とても大きな卵をうみました。めんどりがまんべんなく温められるよう、ネイト君が2～3時間おきにひっくり返し、6週間経ちました。卵からかえたのは、何千年も前に絶滅したはずの恐竜、トリケラトプスでした。ネイト君は、アングル・ビーズレーと名前をつけて飼い始めます。アングルは草を大量に食べ、すごい早さで成長しました。やがて町じゅうの草がなくなり、恐竜の苦手な冬が近づいてきました。アングルは国立博物館に移され、ネイト君も世話係としてついていきます。ところがある早朝、アングルに乗って散歩しているとき、事件が起こりました。アングルが車のクラクションに驚き、トラックを突き倒してしまったのです…。

ネイト君は、身勝手な大人たちに振り回されながらも、考古学者のチャーマー博士の協力を得て、アングルを守り抜きます。ストーリーの展開のおもしろさに加え、恐竜を大事に思うネイト君の気持ちにそって、一気に読み終えます。挿絵も物語を一層ひきたてています。十歳くらいから。

(池田)

10月	11月	10・11月の移動図書館(いずれも木曜日です)				
8日	12日	塚森 地域内 10:30～10:50	沖代 地域内 11:00～11:20	福地(三反長) 地域内 14:30～14:50	米田 公会堂 15:00～15:20	竹広南 公民館 15:30～15:50
15日	19日	岩見構下 公民館 10:30～10:50	岩見構上 公会堂 11:00～11:20	原池団地 公民館 15:00～15:20	山田 掲示板前 15:30～15:50	原 太田東地区農村 交流センター 16:00～16:30
22日	26日	広坂 公民館 10:30～10:50	上太田 公民館 11:00～11:20		吉福 公民館 15:30～15:50	太子 ニュータウン 公民館 16:00～16:30

お知らせ

「幼年物語を楽しむ会」を開きます。

対象：母親・保育者・ボランティア等

日時：11月～来年3月の
第2土曜日(全5回)
10:15～11:30

場所：太子町立図書館

読書会室

申込：10月24日(土)までに図書館へ

『北緯66.6° 北欧ラップランド歩き旅』 森山 伸也 著

本の雑誌社 239頁 2014年10月刊 1,500円 (請求記号)フ293.8

ただあてもなく長い距離を何日もかけて歩きた。そんな願望が募り、著者はラップランドへ旅立った。

大学の探検部時代から、日本の山はもちろんインドネシアのジャングル山岳縦走など様々な所へ行った。その度に「二度とこんな旅するもんか」と心に誓いながら、しばらくするとまた沸々と旅に行きたくなる。そして今度は、とにかく長い距離をズンズン歩きたい。理想は、異国の地で何も誰も情報もない、厳しい自然と気候にさらされた広大な荒野。そんな理想の地が北欧ラップランドだった。その大部分が北緯66.6度より北で北極圏に属しツンドラに覆われたこの地では、歩くのに何のルールもいらない。どうせならと、ラップランドで最長山道、フィンランド・スウェーデン・ノルウェーを跨ぐ距離八百キロの北極圏トレイルに決めた著者は、準備もそこそこに現地へ飛び、地図や情報を手に入れ、四十キロを超えるザックを背負い、一か月余りかかる道のりを歩き始めた。そこで出会ったハイカーたちは、フル装備の自分が恥ずかしくなるほど自然体で、ごく普通の服と長靴に代々引き継がれる山道具を持ち、中には釣りやキノコ狩りなど寄り道しながらゆっくりに楽しんでる者もいた。山歩きが文化として日常に根付いている姿に著者は感嘆する。

スポンジのような道、巨大な蚊の襲撃、空豆大のまめの痛みに耐えかねて町で休養：様々な困難と厳しい自然の洗礼を受けながら、己の身一つで歩く姿がユーモアあふれる文章で軽快に綴られる。自然の中で、食べて寝てそしてひたすら歩く。これが「生きる」ということなのだろう。時には町を離れ大自然に身を置くことも、人には必要なかもしれない。

(池之上)

<日曜日の絵本の時間>

10月18日

時間：11時から
場所：おはなしの部屋
対象：2～3歳
保護者の方も入れます

カレンダーの×印は休館日です。
開館は10時～18時まで。
金曜日は20時まで開館しています。

10月の開館日

日	月	火	水	木	金	土
				×	×	×
×	×	×	7	8	9	10
11	12	×	14	15	16	17
18	×	×	21	22	23	24
25	26	×	28	29	30	31

11月の開館日

日	月	火	水	木	金	土
1	×	3	×	5	6	7
8	9	×	11	12	13	14
15	×	×	18	19	20	21
22	23	×	25	26	27	28
29	×					

地下水

月に一度保健福祉会館で実施される1歳6か月児を対象にした健康診査。その会場の一隅で、図書館職員が毎月30組前後の親子に、絵本のパンフレットを手渡ししている。日頃育児に大忙しのお母さんたちは友人を見つけると近況報告と子育て談義で盛り上がり、会場は学校の休み時間のようなにぎやかさ。中には子どもも頃図書館を利用していたという人もいて、たくましく変貌した姿に驚かされる。

先日広い会場をちよこちよこ走り回る男の子をまめに見ているお父さんがいた。会場には、待ち時間に見るように絵本を並べているが、男の子が乗物絵本の方にやって来たので手渡すと、お父さんが、子どもの頃よく図書館に通っていたことやうそくの灯りの下でお話を聞いた思い出を話してくれた。そして「今も財布の中に子どもの頃の貸出券が入ってますよ」と言うのだった。図書館から遠ざかっても、いつか行こうと貸出券を持ち続けていてくれたのだらう。図書館を好ましい場所として覚えていてくれたようで嬉しかった。「この子がもう少しじっとしていただけるようになったら連れて行きます」と帰って行かれた。(片木)

